お飾りのこころ

御影堂の荘厳

「荘厳」とは、御堂やお仏壇のお飾りのことです。皆さんは日頃、お飾りをゆっくりとご覧になったことはありますか？

大遠忌法要中、御影堂にお参りさせていただきますと、香炉の左右になんと！蝋燭立てが三対もあります。これらは、仏花一対を合わせて「九具足」といって、正徳元（１７１１）年の４５０回大遠忌以来、大遠忌法要で行われた特別のお飾りです。

打敷や、その下の水引（下掛け）もきれいですね。その前の、畳が置かれた台は礼盤といいます。大きな法要では、ここに導師が登ってお勤めするのです。

両脇につるされた輪灯は、真宗独自の仏具です。ご本山ではこの明かりは、昼夜絶やされることのない「常灯明」という灯から毎朝点されます。

周りの柱や壁は金色に輝き、彫刻は極彩色に彩られ、それらが漆黒の漆の床に照り映えて、壮麗な空間が現出しています。

信は荘厳から

『仏説阿弥陀経』には、極楽浄土のありさまについて、次のようなことが述べられています。

極楽世界には、玉垣と宝の網飾り、そして並木がある。それらは皆、金・銀・瑠璃・水晶の四つの宝でできている。……また、七宝でできた池があって、不可思議な力を持った水が満ちている。……岸の上には楼閣があって、金・銀・瑠璃・水晶・硨磲・赤真珠・碼碯で美しく飾られている。……

九具足（『法式規範』口絵写真より）

御堂の内陣は、こうした光景を視覚的・立体的に造形したものなのです。

美しくお飾りされたお内陣に対する時、私たちの心には清らかな感動が呼び起こされ、自然に手が合わさります。昔から「信は荘厳から」と言われますが、本当にその通りだと思います。

ご家庭のお仏壇も同様です。心をこめて、正しくきちんとお飾りしたいですね。

お荘厳

お浄土と仏壇

仏像や仏具をつくる職人さんは、蝋燭の放つ光と影の効果を計算した上で、彫刻や装飾を施すと聞きました。そこで、さっそくお夕事の時、いつも点けている蛍光灯を消して、蝋燭だけを灯し仏壇の前に座ってみました。するとどうでしょう。見慣れた仏壇が一変して、金箔は深みを帯びた輝きを放ち、鏡のように映りこむ漆は、お浄土の池のようです。内陣や仏壇の伝統美は、お浄土の素晴らしさを五感に直接感じるよう、巧みに工夫・表現されていたことに気づかされ、心打たれたのでした。

お花と香りと灯と

仏前に、お花・お香・お灯明をお飾りするのはなぜでしょう？
病に伏せる時、お見舞いのお花に沈んだ心が慰められ、祝いの時には、喜びにまさに花を添えてくれます。お花には、喜び悲しみ、どちらにも、私に寄り添い支えとなる力があるのです。

お香の薫(かお)りは、目にも見えず手にもつかめませんが、薫りほど印象・記憶に残るものはないといわれます。清らかな薫りは、あまねく空間に行き渡り、わけへだてなくすべてを包みこみます。

光は暗闇を晴らし、ぬくもりを届けます。底知れぬ不安におびえる闇を瞬時に打ち払い、冷たく震える心身を和(やわ)らげるはたらきを示すのが、蝋燭の炎です。

日々、お花やお香やお灯明をお飾りする習慣を通し、阿弥陀さまのお慈悲がここに届けられてあることを実感します。お荘厳を整えることは、私があっていく苦しみを乗りきる、阿弥陀さまの力強さに導かれることなのです。

常　灯　明

連絡先

©監修　本願寺仏教音楽・儀礼研究所

シリーズ大遠忌Ⅱ

荘厳